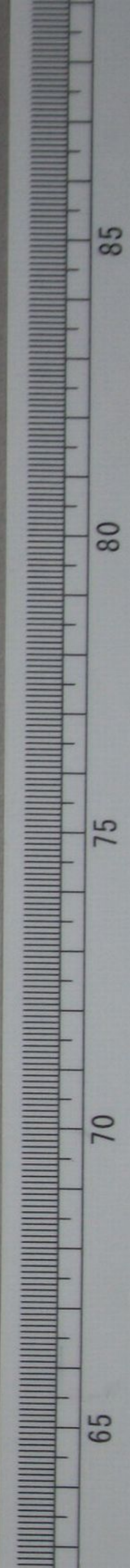


内外新闻

第六卷
全拾

西垣文庫
文庫 10
7347
2



慶應四年戊辰五月廿三日

不許翻刻

內外新聞 第六



七日目每出版 知新館



張夷家
外山光輔印藏本
明治四年自及

内外新聞第六

神戸新聞譯

第六月廿五日
我五月六日

○今度神戸ニ於テ病院御取建ニ相成候上ハ居苗

ノ外國人モ亦差支ナク療養ヲ許スベキ旨ヲ役人

ヨリ通セリ

○病院御取建地所ハ外國人墓所ノ東方ニ當リテ

其四方ニ垣ヲ圍ルベシ尚委細ハ追々示スベシ

○米國軍艦ヒスカタクユー

當月十九日長崎ニ破泊シテ不日横濱ニ赴クベキ由也

西頭文庫

○此頃墓所邊ヲ排徊セシニ當春大坂港口ニテ米國
軍艦ハルトホルド各乗組溺死セシ數名ノ墳墓奇麗
ニ出来セシヲ見タリ

商用 告知

○入港品物先日ヨリ惣テ相カハラズ日本商人ハ
當時大坂ニ居リ先日ヨリノ霖雨ニテ運送物等コレ
ナシ

○金巾價ハ横濱ニ於テハ相カハラズ相場書先日ノ
如シ

○武器ハ當時北方追々鎮靜ニ成シ故注文類モ沙汰
ナシ

○生糸大約二千五百斤夫ケ先日ノ價ヨリハ少々下直ニ
テ買込ノ約定セリ併當港持込ノ品ハ霖雨ユヘ至テ僅
ナリ又未ダ買手無之僅ノ品物アリ

○茶ハ大坂ニテ新茶ヲ貯ルノ風間アリ

○先日ヨリ僅ノ茶トイヘドモ高價ニテ買込タリ且
或人ヨリ二万斤ノ賣茶アルヨシヲ聞得タリ

○新茶賣人コノ間ヨリ追々當地ニ着セリ併價高キ

ユへ買人未夕返答セス當地ニテノ相場ハ横濱ヨリト
ハ高シ横濱ニ於テ極上新茶百斤ニ付二十七ドルヨ
リ三十ドル迄ナリ

○當時賣買ナケレバ諸色相場書名目バカリナリ

○不日蠶卵紙賣買ノ時ニ至レリ先ツ青卵一枚ニ付
價一兩ヨリ一兩一分ニテ約束セリ但シ其紙數高ノ半
ハ金ヲ以テ買ヒ半ハ品物ト交易スベキナリ

同 第六月廿七日
我 五月八日

○過シ六ヶ月ノ間ハ内地不獲種々ノ珍事件多シ今

其大畧ヲ記ス

○大坂兵庫開港ノ儀ハ其以前衆人期限ヲ疑惑セシ
ト雖氏終ニ開港ヲ世界ニ布告セリ

○兩港開ケシ以前第一月一日ノ條約期限ニ違ハル事
ヲ疑ヒ政府ヲ責レトノ企ニテ密ニ英米二國ノ軍艦數ヲ

神戸ノ港ニ来リシニ幸ニシテ難ナク港ノ初メテ開ケシ
ヲ右ノ軍艦ヨリ廿一發ヅミ砲發シテ税セリ又陸地ニ

テモ各國コンシユル館ヨリ國旗ヲ揚テ税セリ
○後程ナクシテ大政大變革ノ時トナリ一橋徳川ハ

將軍職ヲ返上シテ大坂城エ引取レリツキ 続テ戦争ニ及セシ
ビ終ニ敗北シテ江戸エ飯府スルニ及ブ

○日本大皇帝ハ自ラ政權ヲ執ト 令ヲ全國エ布告セラレ

太政官ヲ嘗イレ又開港地エハ夫々官舎ヲ取建ラレリ且

又以時條約取結ビシ各國エ

敵愾ノ趣ヲ布告セラレシ

○當時政府ニ於テ大坂港口ノ船路綿密ニ結搆ナキニ

ヨリ第一月十一日米國ノ豪雄ナル水師提督某并二十

人ノ水夫等岬川口ニ於テ波浪ノ為ニ舟ヲ覆没シ終ニ

非命ノ死ヲ遂タリ爰ニ於テ外國人一紗其不幸ノ災

害ヲ哀傷セリ

○続テ又京坂不穩ヨリシテ大坂在留ノ外國人ハ盡

ク逃去レリ

○北方軍艦ハ兵庫港ニテ南方軍艦ヲ取囲トリカノリ徳川軍艦ヨリ

薩列ノ軍艦ニ発砲

○南方軍艦ハ逃去リ北方軍艦ハ江戸エ出帆セリ

○第二月四日備前兵隊ト英兵ト大坂街道ニ於テ争ヒ
アリシ

○英米二國ノ兵ヲ以テ神戸ヲ固メシテ

○京師ヨリ當港エ勅使着ノリ続テ鎮定セシテ

○森山某旧幕ノ臣カ并ニ從士等江戸エ出立ノリ

○第三月二日備前兵隊司令士池田伊勢列頭ノ事此

人司令官トシテ外國人エ砲發スベキノ令ヲ下セル咎ニ

依テナリ

○同十五日外國人再ビ大坂官舎ニ立戻レリ

○後又堺港ニ於テ外國人ヲ暴殺セシテ

○京都ニ於テ

大皇帝エ拜謁セシト參内ノ途中浪人共警固ノ

士ニ乱暴ニ及ヒシテ

○英國全權公使ハルリーパークス江戸エ出立ノリ

○大政復古ノ初ノ煩雜ニテ諸人通商スルニ難ハズ其後

稍鎮靜シテ商艦等モ來着セシヲ報知セリ

○ハルリーパークスヨリ

大皇帝エ存書ヲ建白セリ此ハ日本人ハ勿論外國人ニ

テモ甚ダ懇親ノ至リナリト云

○余等大坂兵庫ノ兩港此後ノ勢ヲ考ルニ大坂ハ交易

第一ノ場所ト成ベシ唯願クハ日本人追々外國人ト馴
合ヒ旧習ノ惡風ヲ改メ盛ニ通商ノ行レシコトヲ

○大政變革等ニ就キ暫時ノ間万機癡絶セシカ故ニ
魚據居苗地今以テ成就セザルヲ筆記スルハ余等甚ダ

悲痛ノ思ヒヲ成セリ此後ハ一日モ早ク成就シ且兼テ
歎息セシ支件ノ恢復ヲ見シコトヲ頻リニ願フ所ナリ

○後六ヶ月ハ万支宜キニ赴キ過シ六ヶ月ノ憂支ニ
平均センコトヲ願フ

○頃日外國人ノ家作且日本人ノ開店等惣テ改革ノ

赴ヲ見レバ粗後來ノ有様ハ推察セラレリ

○余等今當港ト上海ノ間ヲ往來シ長崎ニ立寄ル
ベキ蒸氣船ヲ製センコトヲ企居レリ

以上

大坂新聞

○旧幕府軍艦の内富士山と唱ゆる船ハ尚五月
九日神戸表に着航せし由余の軍艦開陽廻天

其外二艘ハ徳川氏に社下墨余ハそく
朝廷ニ附屬せし由の風聞

○今般政俸職判折政身

大坂裁判所總督御免
大坂府知事任作付

醍醐大納言

日判吏

播磨景播四守那村文記兼常

岩下佐次右衛門

日判吏

長谷川仁左衛門

日判吏

堀左衛門

小河孫左衛門

日權判吏

税所長右衛門

播磨景播四守那代任免

伊丹右京大進

内海多次郎

○和民初歳古奉堂善坊舎十五六軒強り町家ハ
大半流失せる由大和分來せる人の話なり

京都新耳

○弟四編又布告せし五月朔日淀川筋難船の
時糸紐の内又中京又徑める人なるが金子六百兩
不持して大坂よりけ船は繋りしが兼て不慮乃
用心せしとや携くるる箱の内は金子四百兩と入れ
繩子で腰と結び餘の繩を長くして春俵は結び
付強る二百兩金子ハ綱巻又納め疾く衣類も税

べき支度してそ私め度るや言や漲る大河を游
ぶる陰又這上りける時衆組の者溺るあり人
小五り付くる者三人とを救ひし由水練をゆさ
りし故す之れ共心操の上死に依て人命四つと金
子六百両を金くせし高運の人なりそ伝おと名ハ
すねざりし

○洛東祇園社牛頭天王の神号を瘞止してたの
通マ公坊青紙園舎祭式のみり又就て小舎人雑色
より氏子の町に通達せり

神速素盞鳴尊

八柱御子命五男三女八柱命
檜稻田媛命

宝四日廿日出
羽忍よりの書状中抜出

○去月十日真良仙臺表より羽忍庄内征討費
向指探て波与総督府より出達お成志参殊薩
大山格と助會計方三藝林左馬右弁并二薩長共
隊別率より清三郷様共二十一日仙臺内祭陣同
夜増田宿陣清西郷様ハ此知より出滞陣十四日

後り城屯集之後、山口より馳登り、城後ハ尚杉
林之隠れを退出、自在に引官軍接戦を決定
退くお進、如右林中より奮炮如る、以時、候、系
其、餘、死、傷、出、來、内、四、人、ハ、並、之、擦、表、被、之、存、之、退、日
全快、以、事、と、其、察、以、右、終、日、炮、殺、し、て、熱、軍、一、十、先
繰、上、之、同、夜、中、退、く、新、庄、表、に、隔、陣、之、お、成、以、秀、細
中、と、交、り、不、別、又、日、記、も、あ、り、以、る、退、る、マ、リ、去、先
荒、増、上、之、後、右、二、付、支、三、日、脱、氣、と、告、ひ、其、上、清、家
應、援、吾、體、從、被、以、如、進、玉、小、藩、殊、之、不、練、之、兵、故

鬼角因循遲延、在、以、如、至、四、月、四、日、夜、城、後、八、百
餘、人、天、臺、表、に、不、意、之、押、出、し、以、如、城、市、中、共、之、鎗、炮
燈、と、お、成、中、以、右、同、不、隊、長、系、手、勢、又、七、人、も、討、死
被、以、右、燒、拂、盡、之、山、形、に、押、寄、以、由、之、退、く、以、奉
陣、也、く、以、お、進、之、楯、固、に、廻、り、以、之、付、又、日、新、庄、表、に
隊、繰、出、し、其、餘、新、庄、人、數、も、繰、出、し、尾、死、決、之、
山、を、双、方、對、陣、在、以、以、上、那、在、旗、奉、以、と
し、て、孫、城、以、昨、日、小、衆、及、又、身、と、交、代、被、人、強、之、如
味、方、之、如、右、少、人、數、以、人、請、家、援、兵、お、成、以、内、漸、吐、日

岩城く人数到着す後依竹惣督二子又百程由
 船も出きてあり仙臺表より山形と練込船
 兼兵隊も此今到着山形も出兵者大々参練盛
 二成中酒田漢へ軍艦到着し同軍越後へ
 加兵始ノ清後兵討入由右風吹そ昨日吹指是
 尾花沢出張し城後逃散乱し松子に守りは松子
 多々庄内討入も不遠と愚考仕は松子に候し
 庄内安んて成下は只今尾花沢より報知あり
 城軍一同逃去し新も舟より追進中候し

小越風聞

〇閏四月廿七日の報告と既之新新聞に載り
 事後往來する報知を得る風軍あり廿七日
 後も引続き戦争の要城方烈変防戦して官
 軍諸廣大々を以て苦戦せりと云然と大勝
 利も遂小城の巢窟柏崎も棄五城後ハ漸々
 少方之落退きあり
 〇尤の事件の通月六日夜彼の地より報出
 とも未だも詳しき事を得

早く早く右寛大の 津仁意と割したる
そのなり○先月下旬に相抄 共務院に開幕
陸軍 陸軍隊名二百人強も上陸し 夫より遂に
甲府に闖入せし 此處に甲府取締方 沼津 水野
家中の者共制度もなり 却る肉通せし故今殺
水野家へ急ぎ 津沙法に強もあつた
叔父東光後今以強静にさうよ甲及び乙と
もヶ報のなり 出来たりとも美し 却多事の折
拓之 諸回漸思縮の取手なり 其の大小

度伯能く厚みと
朝意を家中領内士民一統に賦とせしる事
為るに遠くも換布告あり たることと予等
得多しと井野の真愛と堪ず 恭望奉る如し
上海に滞在の友人を報知
○上海に於てコレラ病大流行して死人多し
此病のやゝある日本の地にも汚染せんかと恐怖の
至り之全く不養生よりして汚染する故に
衛生法をたて強く送るものなり

慶應四年戊辰六月

內外新聞第七



七日每出版

知新館

弘

大坂心齋橋筋北太即町並 河内屋 喜兵衛

同 全筋安堂寺町南 河内屋 和助

同 北久太郎町三休橋西 河内屋 新次郎

通

京都三條御幸町角 吉野屋 仁兵衛

同 御幸町姉小路上 菱屋 孫兵衛

同 三條寺町西入 吉野屋 甚助

所

同 富小路四條上九 丁子屋 榮助

同 寺町姉小路上九 錢屋 惣四郎

内外新聞第七

神戸新聞譯

洋曆第七月一日

皇曆五月十二日

○過^{スギ}シ^ニ日^ニ曜^{ヨウ}日^ニ我^ニ五^ニ月^ニ或^ハル^ニ外^ニ國^ニ人^ニ等^ニ布^ニ引^ニノ^ニ滝^ニへ^ニ行^キ

水^{スイ}浴^{ヨク}ヲ^{コト}試^シシ^ニ一^ニ人^ノ異^ニ人^ノ浴^ヲ好^マズ^ニ只^ニ水^ヲ溜^テエ^テ入^レテ^ハ彼^レ

是^レセ^シニ^ハ水^ノ勢^ハ劇^クシ^クシ^テ過^テ深^ク水^ニへ^テ溺^レ込^ミタリ^シニ

漸^ク々^ク岩^ノ石^ニニ^テ擗^リ付^テ大^キ声^ヲ揚^テ助^カ勢^ヲ乞^フヘ^リ時^ニ茶

店^ニ休^ム息^セシ^ニ友^ト人^ト等^ト走^リ来^リ直^ニ水^中へ^テ飛^入リ^捧

繩^ヲ投^テ彼^ノ溺^シ人^ヲ曳^上タリ

此^ノ溺^ル人^水中^ニ於^テ能^ク注^意セ^ルナ^ラハ^スル^過失^ハ有^マ

シキモノヲ余等察スルニ此後ハ水浴ヲ嫌フナルベシ
○甚ダ愛憐深キ余等ノ支配人ハ今度兵庫大坂神
戸ノ全權ヲ命セラレ國王ヨリ改テ印章ヲタマハリシト
余等此事ヲ聞テ太ダ喜悦ノ思ヒヲナセリ

大坂ヨリノ新聞

○前月廿三日我五月四日ノ夜十人計ノ強盜双刀ヲ帶ヒ
居留所近辺ノ日本人家へ入り金子二千兩ヲ奪取
レシト

○米國飛脚船バイコクヒキヤクフネコスタリカ船ノ来着ニ依テ前月三日

マデノサンフランシスコノ記事ヲ得タリ

○日本軍艦富士山ハ今度大坂へ来レリ俟シ持至ハ前
日ニ違へリ破泊場所ハ當春南方ヲ襲ヒシ時破泊
セシ如ナリ

第七月二日
我五月十三日

○米國飛脚船ノ着ニ依テ厄ノ重大事件ヲ聞得タリ
合衆國大統領シヨレソン各人ハ勤務ノ過失アリテ放官
サレシト是ニ依テ争端モ開ク可キヲイエムスタントン
人々カシテ止ミタリト

大紗領後嗣ハ評議役ノ撰挙ニ依テセ子ラル官スチヨ

ヒールド人ニ決定セリ

共和政治社中ノ撰挙ハゼ子ラル官ガラント人ヲ以テ大

紗領ニ充テコルフアツクス名ヲ以テ副紗領トセント欲ス

之ニ依テ来ル第七月四日ニ大會合アルベシ

大紗領ノ大任ニ充ランヲ希望スル人々ハ裁判役總

督ニテチヤス名并ニセーモール名等也此ノチヤス名

ナル者ハ當時國中ニテノ有名ナル豪傑ナレバ或ハ

大推ノ歸ス可キヲ察セリ

右人撰ノ大會合アラバ恐クハ戦争ヲ開クベキ機會ニ

至ランコトヲ思ヘリ

○頃日双刀ヲ帶タル日本人ポルトカル人ジヨセフマスカ

ラナ名ノ酒店へ入り酒ヲ与ヘンコトヲ乞シガ既ニ醜

ノ体ナレハ主人是ヲ肯ンセザリシニ頻リニ巧フニ依

テ一瓶ヲ与ヘケリ暫時ニ飲ミ終リ再ビ巧シカドモ

今ハ主人与ヘサリケレバ彼ノ日本人大ニ怒リ刀ニ手ヲ

掛ケ已ニ抜ントスルヲ見テ主人ジヨセフ名早クモ飛カ

、リ刀ヲ奪取り大音ヲ揚テ加勢人ヲ呼立ケルニ幸ヒ

此時日本取締リノ役人通行ノ折ニシテ速ニツノノ刃
ヲ奪取り此乱暴人ヲ捕ヘ行ケリ

時ニホルトガルコンシユルハ在留ナキニ依テ主人ジヨゼフ
ヨリ米國コンシユルエ此由ヲ訴出タリ

米國コンシユルハ右ノ裁判ニ就テハ彼ノ日本人ニ刀ヲ帶
ルヲ禁ジ勸人トシテ永ク此ヲ使ヒ後子生涯追放ス

可キ旨ヲ或人マデ申出タリ後日此日本人相當ノ刑ニ處
セラレバ余等悦ヲ以テ其事ヲ記ス可シ

日本士官ハ公務ノ外ハ常ニ帶ル刃ノ双刀ヲ脱却スルノ

時節ヲ余等頻ニ待ナリ

○佛國全權公使リオンロチエス人ハ轉任シテ本月廿六日

我五月七日ゼオランド名ナル砲艦ニテ當港へ着シ翌日ドブ

リークス名軍艦ニテ大坂エ行キ今日帰港セリ

同月廿九日我五月十日月曜日朝九字長崎へ出帆セリ此

時港内ノ軍艦ハ尽ク祝砲ヲ發セリリオンロチエスノ日本

ヲ忖ルハ實ニ在留ノ佛人ニ於テ大ナル不幸ト云ベシ

末船

第六月廿九日ゼオランド名横濱ヨリ同廿七日オーサカ名同上

同 廿九日キヨホカ名船同上 同 卅日オルカン名船同上
 第七月一日コスタカ名船同上

去キヨハク船デツ子

第六月廿九日フレライス名船横濱エ 同 ゼオラン名船長崎エ

同 オーサカ名船長崎海エ 同 卅日オルカン名船横濱エ

同 卅日 デスパチ名船横濱エ 第七月二日コスタカ名船上海エ

以上

大坂新年

○五月廿日南幸町二丁目八百屋町へ入信濃屋を来て
 旅宿せし小田馬之助といふ士と石捕らんと拔取
 の陰謀を向ひしりし馬之助の疾逃去す余輩
 二人を石捕らんとし

祝といひ小田馬之助といふハ元藝兵衛の士を
 南宇清士陵武隊といふ隊長よりしり故をて役
 を放さる京朝より隊中へ送るべき金穀杯を拒
 絶根を晴さんとせし由なり近頃ハ立派な事なり

家来に又人も石巻ひ毒と抱一乗馬を引かせ
健素せし故盗賊とてあり一杯と同陣とれども
全くたゞあつたこととせ

○週日より紀及田辺沖は東方の軍艦一二艦碇泊
せ里との風耳ありと大坂府より役人方に出張乃
由巷説もあつたふ紀及より手紙の写しなりとて
或人の兄せうきとたゞ記と

前畧十三日新和舟出碇に大船小船二艘着
亦い廿又日夕前大船着又百人乗組居薩

土肥後藩に強陸よりも二大隊本り来りい
様子見の川支つて山に上り遶りて
い大將の判書局に様子一紙合点系りて
少及及くいり内へ紙を下し

論者曰右の書面も其実を記し同そのを
替く爰に載り世人の考を待

○第四編に記せし経業師寅吉の始末を
面を披華してたゞ奉ぐ

伏打八月十八日アメリカ國の領分サンフランシスコへ着

真行せし日、故障あり初日より金主の外、
種々難題を云掛り、其ハ第ニミ家族八人の^{ミウケ}上
サニフラスコは^{名地}、^{ヒヤチヘ}エトクトニは渡り夫
よりサクラメントに渡り、^{ヒヤチヘ}又人殺減し、^{ヒヤチヘ}異由と全
より云うけし、^{ヒヤチヘ}寅吉大に立後、^{ヒヤチヘ}後安返答に及ひ
たれば、^{ヒヤチヘ}金主もサニフラスコは^{ヒヤチヘ}殊に^{ヒヤチヘ}並に^{ヒヤチヘ}家族と山林、^{ヒヤチヘ}匿
まへく、^{ヒヤチヘ}或は^{ヒヤチヘ}銃炮を打ぶる、^{ヒヤチヘ}採と^{ヒヤチヘ}身^{ヒヤチヘ}難を^{ヒヤチヘ}なり、^{ヒヤチヘ}神風^{ヒヤチヘ}掃
横濱の^{ヒヤチヘ}挨拶を^{ヒヤチヘ}同人及び以上四人、^{ヒヤチヘ}ハ日本、^{ヒヤチヘ}取り余
ハニウヨルクへ渡るべき、^{ヒヤチヘ}又^{ヒヤチヘ}示^{ヒヤチヘ}談^{ヒヤチヘ}一十月六日、^{ヒヤチヘ}繁^{ヒヤチヘ}船^{ヒヤチヘ}せし

又船中にて又發動し、^{ヒヤチヘ}及ぶ^{ヒヤチヘ}第^{ヒヤチヘ}四^{ヒヤチヘ}日^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}依り^{ヒヤチヘ}元^{ヒヤチヘ}の^{ヒヤチヘ}強^{ヒヤチヘ}宿^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}戻り
横濱^{ヒヤチヘ}に^{ヒヤチヘ}人^{ヒヤチヘ}八百^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}唐^{ヒヤチヘ}物^{ヒヤチヘ}等^{ヒヤチヘ}の^{ヒヤチヘ}扱^{ヒヤチヘ}ひ^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}そ^{ヒヤチヘ}に^{ヒヤチヘ}宛^{ヒヤチヘ}送^{ヒヤチヘ}文^{ヒヤチヘ}を^{ヒヤチヘ}送^{ヒヤチヘ}り、^{ヒヤチヘ}漸^{ヒヤチヘ}に
和^{ヒヤチヘ}談^{ヒヤチヘ}一^{ヒヤチヘ}同^{ヒヤチヘ}十六^{ヒヤチヘ}日^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}以^{ヒヤチヘ}の^{ヒヤチヘ}和^{ヒヤチヘ}又^{ヒヤチヘ}繁^{ヒヤチヘ}十二^{ヒヤチヘ}月^{ヒヤチヘ}三^{ヒヤチヘ}日^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}子^{ヒヤチヘ}方^{ヒヤチヘ}と^{ヒヤチヘ}そ^{ヒヤチヘ}の^{ヒヤチヘ}名^{ヒヤチヘ}
和^{ヒヤチヘ}中^{ヒヤチヘ}に^{ヒヤチヘ}死^{ヒヤチヘ}を^{ヒヤチヘ}同^{ヒヤチヘ}七日^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}ニ^{ヒヤチヘ}ウ^{ヒヤチヘ}ヨ^{ヒヤチヘ}ル^{ヒヤチヘ}ク^{ヒヤチヘ}へ^{ヒヤチヘ}着^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}一^{ヒヤチヘ}正^{ヒヤチヘ}月^{ヒヤチヘ}元^{ヒヤチヘ}日^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}分^{ヒヤチヘ}真^{ヒヤチヘ}北^{ヒヤチヘ}
せし、^{ヒヤチヘ}又^{ヒヤチヘ}二^{ヒヤチヘ}日^{ヒヤチヘ}三^{ヒヤチヘ}日^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}以^{ヒヤチヘ}の^{ヒヤチヘ}寅^{ヒヤチヘ}吉^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}發^{ヒヤチヘ}病^{ヒヤチヘ}し、^{ヒヤチヘ}同^{ヒヤチヘ}十六^{ヒヤチヘ}日^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}終^{ヒヤチヘ}に^{ヒヤチヘ}病^{ヒヤチヘ}死^{ヒヤチヘ}
を^{ヒヤチヘ}是^{ヒヤチヘ}より^{ヒヤチヘ}金^{ヒヤチヘ}主^{ヒヤチヘ}の^{ヒヤチヘ}外^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}小^{ヒヤチヘ}人^{ヒヤチヘ}等^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}換^{ヒヤチヘ}金^{ヒヤチヘ}の^{ヒヤチヘ}價^{ヒヤチヘ}と^{ヒヤチヘ}し、^{ヒヤチヘ}そ^{ヒヤチヘ}に^{ヒヤチヘ}子^{ヒヤチヘ}役^{ヒヤチヘ}乃^{ヒヤチヘ}
者^{ヒヤチヘ}を^{ヒヤチヘ}彼^{ヒヤチヘ}方^{ヒヤチヘ}に^{ヒヤチヘ}取^{ヒヤチヘ}ら^{ヒヤチヘ}ぶ^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}そ^{ヒヤチヘ}の^{ヒヤチヘ}由^{ヒヤチヘ}と^{ヒヤチヘ}云^{ヒヤチヘ}掛^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}或^{ヒヤチヘ}ハ^{ヒヤチヘ}荷^{ヒヤチヘ}物^{ヒヤチヘ}と^{ヒヤチヘ}云^{ヒヤチヘ}ふ^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}了^{ヒヤチヘ}
と^{ヒヤチヘ}擡^{ヒヤチヘ}ぐ^{ヒヤチヘ}の^{ヒヤチヘ}事^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}起^{ヒヤチヘ}り^{ヒヤチヘ}て^{ヒヤチヘ}家^{ヒヤチヘ}族^{ヒヤチヘ}の^{ヒヤチヘ}男^{ヒヤチヘ}女^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}難^{ヒヤチヘ}儀^{ヒヤチヘ}と^{ヒヤチヘ}及^{ヒヤチヘ}ぶ^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}由^{ヒヤチヘ}也^{ヒヤチヘ}
或^{ヒヤチヘ}人^{ヒヤチヘ}第^{ヒヤチヘ}四^{ヒヤチヘ}編^{ヒヤチヘ}を^{ヒヤチヘ}見^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}難^{ヒヤチヘ}ト^{ヒヤチヘ}て^{ヒヤチヘ}曰^{ヒヤチヘ}、^{ヒヤチヘ}寅^{ヒヤチヘ}吉^{ヒヤチヘ}ハ^{ヒヤチヘ}元^{ヒヤチヘ}系^{ヒヤチヘ}師^{ヒヤチヘ}二^{ヒヤチヘ}系^{ヒヤチヘ}新^{ヒヤチヘ}北^{ヒヤチヘ}

芥福翁と云くは、倭に小家が五（念合の）是又（何れか）經居して親を
 大吉と云共小寺町（只をん）誓言於寺の境内（そこの）て多妻（てづま）煙業を
 せし見物の人又一抄二抄（せん）を乞ふ（こひ）至る（いた）下（げ）穢（せん）の者あり
 天保の本煙業師山幸小徳（うんごう）り礼抗（れい）返り竹沢（たけさわ）辰次（たつじ）指
 多獨樂等（たごくま）と云似（まな）る左夫（さぶ）早竹（はやたけ）寅吉（とみきち）と号し（なづ）形（かたち）抄（しり）て
 煙業と真（まこと）乃（すなは）ち拙（ちやく）在（あ）るを（い）知（し）り（ら）る人（ひと）の寅吉（とみきち）が
 左夫（さぶ）と稱（なづ）し（ら）哥（うた）舞（ま）妓（ま）役（やく）者（しや）の如（ごと）く自（みづか）ら（し）る大（おほ）なるを惡（にく）
 む（も）ものも多（おほ）く（し）る（ら）初（はつ）る下（げ）穢（せん）の（し）更（さら）に（し）祀（まつ）載（ま）する
 る新年紙（しんねんし）の名（な）と下（くだ）さん（さん）を憂（うれ）ふと

福者若日独り我輩の思ふ所ハ又違へる波（なみ）の洋（やう）形（かたち）
 の始（はつ）終（しゆう）を記（しる）して外（ほか）玉（たま）人の情（なさけ）態（たて）をも察（さつ）知（し）るべく
 己来（こ）三思（さんし）を加（く）へ（し）漫（まん）る外（ほか）國（くに）へ後（あと）り過（あ）る（ら）意（い）難（なん）
 を醸（か）成（じやう）し（て）甚（しん）友（ゆう）は至（いた）る（ら）内（うち）外（そと）國（くに）も（も）關（かん）係（けい）を（も）不（ふ）
 及（およ）ぶ（し）ま（し）さ（し）小（こ）派（は）と注（ちゆう）意（い）を（も）とる（ら）又（また）寅吉（とみきち）元（もと）下（くだ）穢（せん）の者
 との（と）ども（ども）藝（ぎ）を以（もつ）て教（しよ）人の棟（むね）梁（りやう）と成（な）る（ら）も又（また）そ（の）及（およ）ぶ
 於（お）こ（の）ハ一個（いっごう）の豪（ごう）傑（たつ）なり功（こう）名（めい）ハ君（きみ）子の欲（ほ）せ（ら）ざる（ら）而（しか）ん（ど）異（い）
 ハ天地（てんち）の定（さだ）理（り）寅吉（とみきち）名（な）利（り）の二（に）ツ（つ）を欲（ほ）して外（ほか）玉（たま）の鬼（おに）と
 なる（ら）も是（こゝ）又（また）一（いつ）ツ（つ）の教（しよ）戒（かい）なり（と）

○五月十六日横濱と出帆して大坂に着せりと云
人の話より五月十五日夜更の刻江戸表市中上野
辺より火の子上りより由を伴い出火の勢を極し
の風がせりと云

京都新聞

○小松帯刀丹羽淺次郎大村益次郎小原仁兵衛土肥
縣益山田市長尾の陰原松吉并新田三郎木村三郎
和紙澤一助後田左馬土方大一并徳島徳内小笠原権六
江友新平尾田権次并小川克一助右等より地方より

江戸府の職掌を 仰付退くは東下にお成由

○富岡 羨高の縁新と云

楠公法廣法建管の付御志を傳へ

きりて後又法廣を傳へる歌

本つて下は君よ仕へて天津日は

光りて年あはぬいとをりてそらんゆ

りけく夫の心を法へてせしむるをりて

ちとせ乃後子うわるとをりて

国四月廿又日出信及長光寺又分て五枚中と云

○甲府の方も又く賊徒寄り集ひ執おぼへ付此二十
 四日松代より兵隊二小队大砲二門司令砲手等外
 附屬者三百人程出張あり由日く八方より兵隊通
 仍何となく強々出張りく日と昔く今年松
 代候分京初甲州戦後より外緒亦出張ハ縣安事
 二ハ費用も又不少りと云ふ信及路ハ松代候を
 一ト力之致一只管下民之至りゆを神の如く裁
 い撫子ありけ松代候去隊通仍と云れハ古民共往
 来之平伏をも合せ解之布中ハ美下情を得又

能く國勢之心を用ひたる一と云々

関東の風耳

○閏四月十九日江戸常盤橋内賊前候に邸に
 在陣する倉敷江東殿守清之内堀橋候の人数九一
 大隊中り横濱に繰出しこお成回所より蒸気船にて
 羽取店內に餐向なりとせ
 右行軍中、薩藩士四人土藩二人加りハ監視者な
 るんを云統隊の内二小队中りハ大統護衛に短
 銃を携へる余ハ少銃士統え也銃を携へ大銃三挺

傳大田春に進軍大田在藩主塔ハ依余藩に
陣屋ハ本家より吉田侯の家臣に以て之とせ

下総丑辰静の始末

○四月廿三日下総小流山丑屯集の絨夜江戸より入
と千代田ハ押来る事あり後赤野依去系勢出張の
紅絨夜押来る様子を

同廿四日松戸歌より絨夜入府せんとする由故
兩藩の兵隊新編く方、陣を移と一隊の絨松戸
居より別談判し上兵器と官軍へ交は後赤野

これを護る様よ又一隊の絨松戸の間及より千代
又掛りたるを依去系藩引返してこれを止ノ絨夜と
も伏後せしめ薩兵の兵とせし格獲し五揚る所乃
兵器ハ 大総督府へ是出し翌廿五日應援の薩兵
ハ江戸引返同廿六日けのの絨夜ハ因安の子引後
一これ成東山の絨夜辰静と
同四月朔日木更津より屯集の絨夜押来るけのハ
須本藩 出張なり絨ハ紅搦歌屯を依去系藩も
應援して松戸ハ八幡と接る絨夜本謝罪の旨を本と

後も兵器の波にまどと公募す依り落首ふ為
同日麻屋手詰の法判と成八幡口へ後赤坊具塚村へ
美堂督行徳口へ籠赤坊孫う谷口へ統去原坊とよふと
定めく成の宿陣船揚仕寄せこれ成し由

同日未明八幡宿赤子具塚美堂より成徳より押
寄戦事と成孫う谷口も統去原と合戦を成む
是か三方の戦ひ官軍先鋒若戦なりけ日統去原
勢奮戦しと船揚宿へ押寄せ同所に放火し成を
追拵り善兵二小队急援とて度又あつと云

同四日松津両家の兵船見門を出張

同五日佐倉の進軍し船揚放走の成徳本更津より里

谷口又陣をり由せしあり

同六日千早の向に進軍せりけ日先日よりの戦成勢強

大いびつあつ依り副総督出馬と成先鋒薩長兵

大村茂等来会せ

同七日成軍上総より八幡口へ押出し又井川を要害とし

て防戦を成又放走せり官軍婦ヶ崎と追討又井の

陣をりあふり

同八日官軍本更津去里谷に押寄る城本早くを
海陸より逃去す一ト先法静及及ぶと云

同十日より官軍追々江戸表に凱陣と云るなる由

説同上総下総田子の佐幕の小藩多々いけ戦

小段走せし一城後多具洞辺より乗船し相及

去勢湊に上陸し走より甲府に横切せしとの

ちしんと程を詳説と聞得たハ第八編之布

告をぞ

知新館告文

此社中ニ於テハ珍事并ニ諸相庭物等ヲ記スノ本意
ナリ又館外ノ人タリト世ニ功能アル事共ヲ衆人ニ
示サント欲セラルノ類ハ此社中へ御示談アラバ速ニ
上梓シ廣ク海内ニ布告スベキ者ナリ

浪華 知新館

- 大坂心齋橋本町南入 河内屋 忠七
- 同 北久太郎町四丁目 河内屋 清七
- 京都四條河原町西入 山城屋 勘助

弘

大坂心齋橋筋北太郎町並 河内屋 喜兵衛

同 今筋安堂寺町南 河内屋 和助

同 北久郎町三休橋西 河内屋 新次郎

京都三条御幸町角 吉野屋 仁兵衛

通

同 御幸町姉小路上 菱屋 孫兵衛

同 三条寺町西入 吉野屋 甚助

所

同 富小路四条上 丁子屋 榮助

同 寺町姉小路上 錢屋 惣四郎

慶應四年戊辰八月

内外新聞第八

浪華 知新館

内外新聞第八

海外新聞譯

○高法報知ハ前日ニ異ラザルガ故ニ今コレヲキサイ記載セズカク蠶卵紙ハ此頃ヨリ賣出セリ極上品ニテハ一枚ニ付二兩一分ヨリ二兩マデニ賣シコトヲ日本商人願フ

日本商人蠶卵紙ヲ賣シタル者ハ莫太ノ損分ニ成リシトゾ

タコウホルモサ地名ニ在ルホワイト人名ヨリ

申来リシ彼地ノ事情

○此國土人ハ稍閑化シタルト聞ケザルトノ二種ニ分チ未

夕開ケザル徒ハ支那人ト交接シテ誓ヲ結ビ稍彼ノ風俗ヲ
慣ヘリ併自國ノ言語ヲ用ヒシ故兼テ定メ置シ場所ニテ夕
カウヨリ東北四十五里ノ地ニ任スル土人ト支那人ト八日
毎ニ會合シテ通商セル通弁ヲ為セリ以所ニ於テ支那人富
饒ノ島人工鍊鹽麻煙草薩摩芋等ノ諸品ヲ商賣セリ斯ノ如
ク互ニ高用相通スルトイヘトモ支那人ノ内地ニ入ヲ許サ
ズ島人モ又イマダ以ノ境ヲ出ズ若シ犯シテ境内ニ入者ア
レバ直ニ之ヲ殺害スルノ惡風習アリ斯ノ如ク夷俗ノ甚シ
キ徒トイヘトモ外國人エハ甚ダ慇懃厚情ヲ以待遇シ且境
ニ出入スルユトヲ許セリ右土人ノ人種ハ皮膚黒色ニシテ

容貌美シク毛髮ハ黒ク目モ又黒シトイヘトモ大キクシテ
且丸ク稍支那人トハ違ヘリ其土人人毎ニ弓矢并ニ銃ヲ能
使用セリ又國境ハ甚ダ峻シクシテ攻襲人ノ為ニ別ニ備ヘ
ヲ要セザルノ地形ナリ以土人ノ起原ヲ論スルニ至テハ如
何ヲ知ラズ記スベカラズト雖モ事ト支那人トハ稍違ヒ寧
マレト^各地人ニ相似タリ此國ノ土風甚遊戯ノ道ヲ好メリ余
此國ニ就キ將來ノ事ヲ案スルニ支那人彼ノ狡黠ヲ以内地
ノ貴品良物ヲ經テ終ニ^各國國ノ支那ニ屬スベキヲ察セリ
去年戰爭ノ後再復戰ヒニ及ビシカド幸ニ勝利ヲ得シ
一ハ全ク魯斯耶ノ應援ニヨウテナルベシト案スル彼

地ヨリ報告セシ書面ノ一ヲ以テ其大旨ヲ示ス

朝鮮ヨリ來狀ノ寫

一筆致啓上候先便奉入御意候異船來寇ノ一件任官呼下返
詞ヲ以テ尋問之趣意内々聞取候處去月十八日京畿道ノ屬
領永宗ト申島ニ大美國ノ船一艘到來イタシ人數百余人上
陸姦慢猖獗スルヲ以水官ノ者ヨリ申出則永宗ノ僉使孝哲
ト申人單騎ニシテ馳趣竊ニ伺ヒ直ニ引返シ密ニ軍令ヲ下
シ伏兵ヲ設ケ賊ヲ要地ニ誘出シ斷然及接戰候所賊軍大ニ
敗走竟ニ巨魁者二人ヲ斬從卒者凡八十人許討殺殘徒脚船
飛乘リ或ハ溺没或ハ漩泳漸ニ本船へ逃歸候無程同所出帆

ノ由ニ付委細ノ儀、未不相知候得共此節之一戰我邦ノ人民
死傷一人モ無之候由此後トテモ渠賊幾度窺ヒ來候共同様之
事ト被存候青徳氏申出候尤大美國ハ何國ニ候哉ト相尋候處
矢張一昨秋來船ノ佛夷ノ由返詞來候右爭戰ノ次第今般疾外
國ヨリ官聽工奉スヘキ折柄吉封幸右衛門歸國申渡候ニ付書
余者同人へ申合置候条御美知下サレ官邊御届向キ殿様御旅
館工御注進可然仰上被下度奉希候恐惶謹言

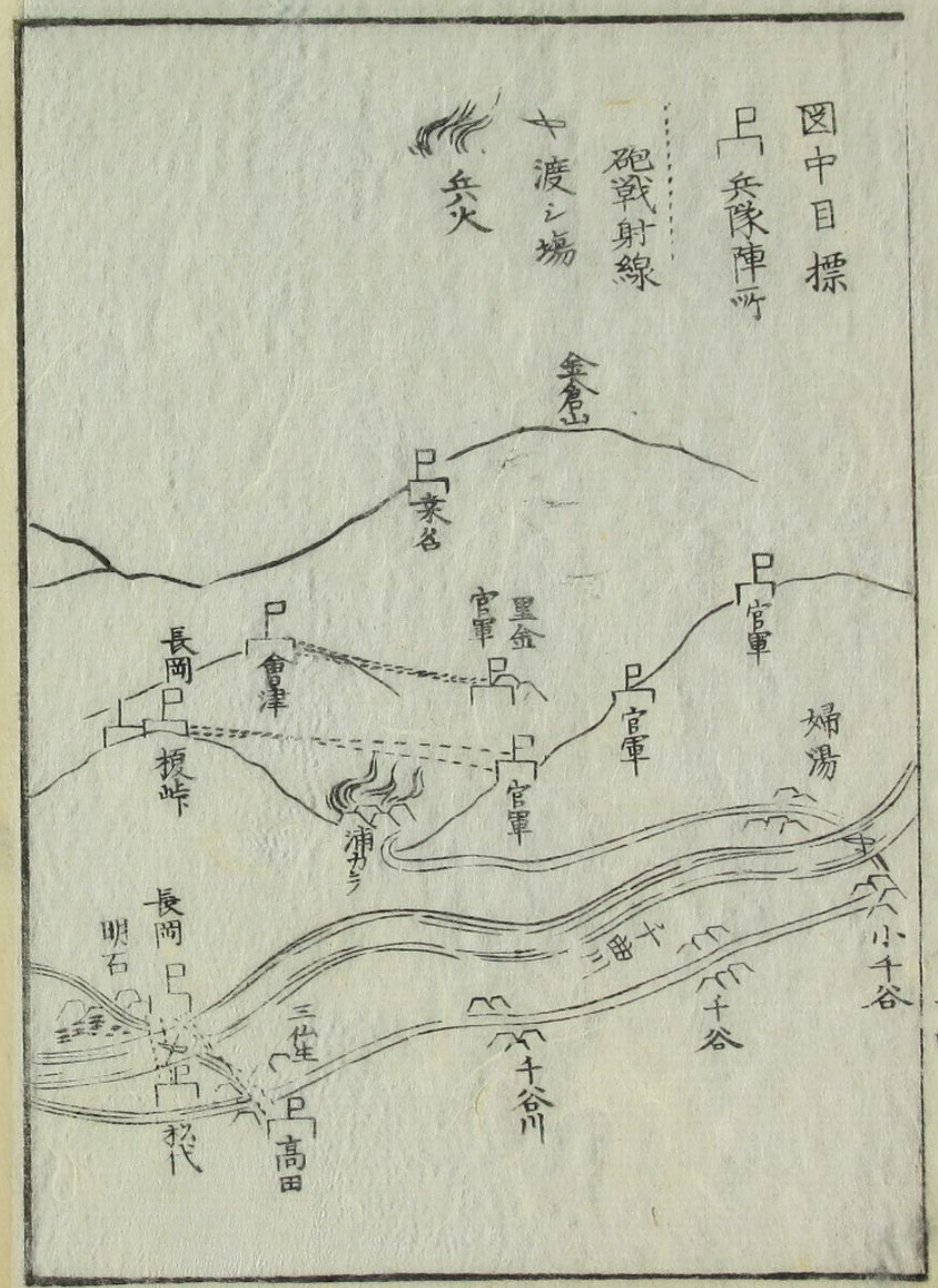
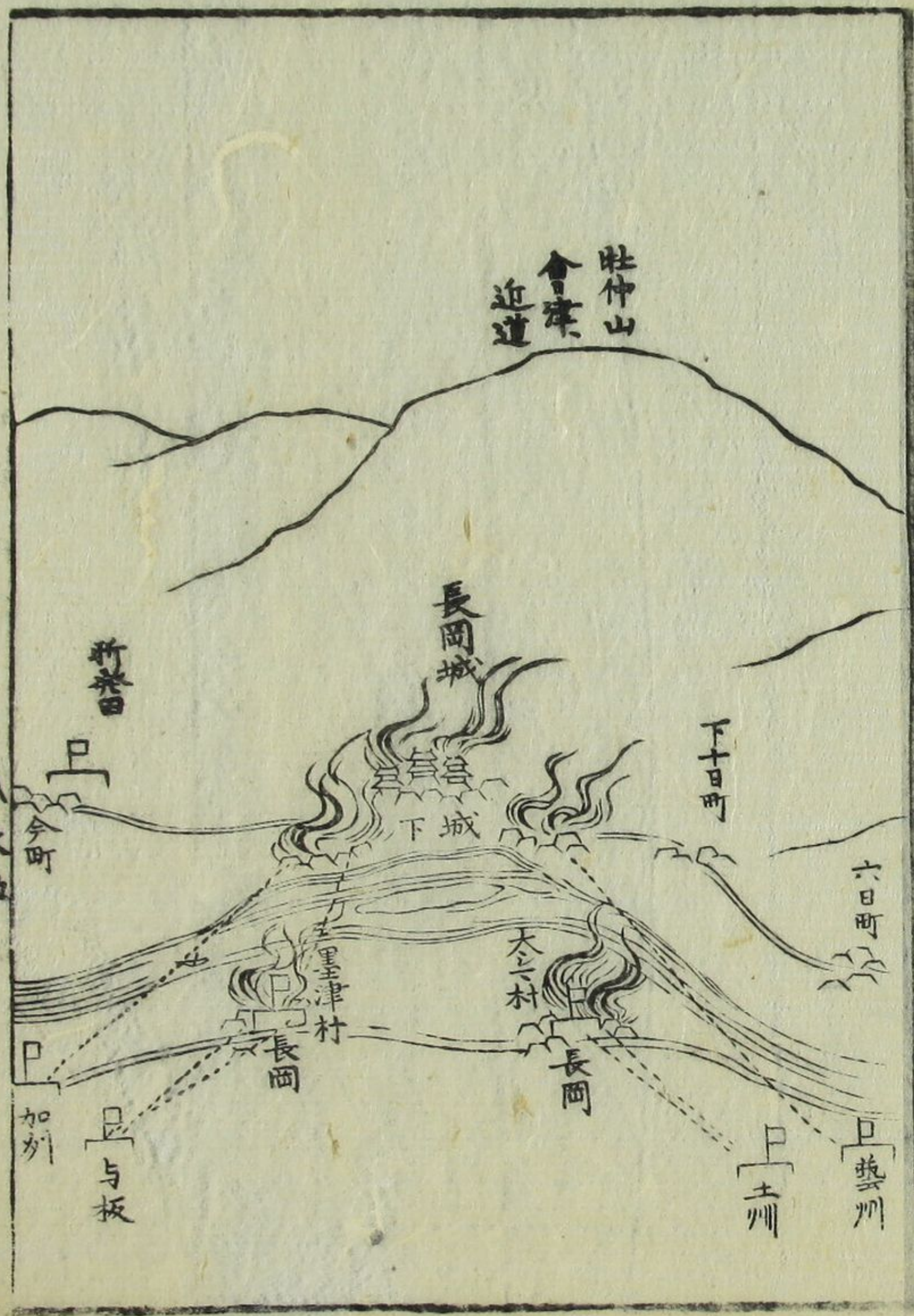
閏四月十五日

御支配御連名

長岡合戦七八日頃ヨリ毎日戦争ニテ双方打合ニ相成川満水
ニテ川向ト川手前ト打合毎日ニ御坐候
今日迄ニ九日斗戦争ニ御坐山ノ手口妙見ト申処尾州之藩松
代之藩信州大名所々藩川手前ニハ薩長之人數高田人數御本
藩御人數入代リ々々打合ニテ毎日怪我死人七八人斗宛有之
候由川ハ丹波嶋ノ下モニテ大川也川幅半里斗有之由誠ニ洪
水故渡舟等モ六ヶ敷ニ付川ヲ挟ミ合戦ニ御坐候上坂田ヨリ
十七日ニ長岡口宮市ト申駅ニ線出シニ相成官本ヨリ川迄二
里斗リ有之ニ付大砲ノ音雨ノ降候様相聞申候今ニ長岡ノ城
ハ落城無之追々官軍之方線出シニ相成一刻モ長岡落城相待

申候

長岡戦争之处官軍方勝利ニテ信濃川ヲ打渡レ一番ニハ船二
艘ニテ昨夜御本藩御人數中之島ニ相渡リ夜ニ入向ヘ渡リ込
ニ番ニハ薩長之人數打渡リ候日數十日之間川ヲ挟ミ大砲等
打合ニ御坐候長岡城下ヲ三四ヶ所ヨリ大砲ニテ焼拂大敗軍
之様子ニ御坐候昨日見物合戦場半里斗リ手前ニテ長峯ト申
小高キ処へ罷越打合ノ処目覚數次第ニ御坐候味方怪我死人
未々相討リ不申昨日迄惣人數之内十五六人モ有之其内死人
四人有之由今十九日四ツ時頃長岡城焼拂ニ相成官軍下殘川
ヲ渡リ長岡城下所々大砲ニテ焼拂ニ相成味方大勝利ニ御坐



候事

右北越ヨリ持歸リシト云戦地之圖ノ写

論者曰右文中前後或ハ重言ニ成リタル如等アレハ強テ不
改傳写ノ俛ヲ記ス讀人怪シム事ナカレ

或人之說

○先ニ布告セシ信為飯山エ乱入セシ賊軍ノ隊長タル古屋佐
久左衛門モ何レノ戦争ニヤ長為之戰士ト組討ノ勝負ニテ戦
歿セリト古屋カ所持ノ胴乱ナリトテ大キナル胴乱ヲ分捕セ
シ由ヲ語リテ見セラレシ由

京都ヨリノ報知

○先頃ヨリ上京アリシ旧幕府旗本ノ面々

朝廷ニ歸順ノ輩本領安堵之旨被 仰出當六月廿七日不殘參

内御礼相濟追々在所エ可引取トノ御事ナリト右ノ面々高

千石ニ付二百兩宛金子可差出儀ヲ被 仰付其内攝州地黄ノ

領主能勢氏ハ徳川氏ノ時ヨリ京師日ノ国御警衛ヲ勤メラレ

當春ノ騷乱ニモ始終同所ヲ警衛アリ幕府左祖ノ色ナク同四

月並警衛無滞勤メラレシ切ニヨリ右出金之儀ヲ差免サレシ

ト是モ又規模ノ事也ト沙汰ス

○五月下旬仙臺藩京詰之人一屋浦ヲ又上ラレ江為ノ領地ニ

慶應四年戊辰八月

內外新聞 第九

浪華

知新館

内外新聞第九

神戸新聞記

○今般神戸ニオイテ海軍所御取立ニ相成追々海軍御開
キ可被成御趣意ニテ日々調練有之水夫小頭始水夫ニ至
追已ニ百人余モ集候由

海軍掛判事試補

白峯駿馬
外一人

○橋本久太夫ト去人御軍艦乗組將帥被
出来次第海軍ニ有志ノ者追々御扶持ニ相成戈量ニヨリ
夫々至當ノ職ヲ命ヤラルヘキ事

○七月十二日大政官ヨリ東西本願寺ノ門主ヲ 勅命ヲ
以テ召ス其御趣意ハ此度大坂本願寺掛所 朝廷工被借
召度トノ御沙汰恐来シテ歸山ス翌日使僧ヲ岩倉殿へ遣
シ 帝御在坂中 玉座如何致シ候哉本堂ハ日夜万民
ノ渴望^{カカモウ}礼拜スル処ナレハ御憐愍^{レンミン}ヲ垂レ給ヒ其儘差シ置
セラレタシト歎願ス然レハ 玉座ハ暫時^{シヤウジキ}幕ヲ以テ困ヒ
本堂ハ大坂府裁判所ノ處置ニ任スヘキコ即大坂掛所ノ
役僧右之趣ヲ裁判所へ訟^{ソウ}フ然ルニ此節大坂府ノ知事他
行ニヨリテ未タ何タル御沙汰ノ有ルヘキヤヲ不知^{シラ}確ト
シタルコト八十篇ニ出スヘシ

評日或人曰西御堂ヲ豫^{アサカシ}メ御用意ノアル事ハ全ク奥羽
ノ賊徒威焰^{キエン}イヨク盛ニシテ追々賊軍京畿ニ逼^{オモ}ルユ
ヘ 主上ノ御立遣キ場所ノ御意杯ト申ス者アリ
是全ク好事ノ者ノ説乎或ハ姦商共人氣ヲ動搖サセ武
器類ヲ大ニ賣^{モノズキ}ントノ策ナラン又曰英佛人追々渡来已
ニ富島辺立ノキ仰セ出サレタリ彼地モ夷館ト成ル故
全ク英佛ノ大將分ノ館ト成シ玉ヲ乎未タ確説ヲ得ズ
七月廿七日頃久我大納言殿東北遊撃隊ノ將帥トナツテ
東御堂ニ着シ玉ヲ兵隊ハ秋田及ヒ薩劔ノ由近々東北御
發向有之候

○當春已來肥前浦上辺如々ノ者多人數耶蘓天主教ニ被
誘引候ニ付急度嚴科ニモ可被處ナレ此此外ニ惡事モナ
ク畢竟ハ利欲ニテヨヒ又ハ怪異ニオビヤカサレ候愚民
ノ常情不便ニ被思召近辺諸宗ノ寺院工教諭向被仰付
候得共彼邪毒膏肓ニ入り一向改心不致候ニ付テハ往々
刑罪ニ相成候者モ有之尚殘ノ人數讚劬高松侯へ御預ケ
ニ相成頃口京都ニオイテ兩本願寺御門主真正寺御門主
等へ教諭可致旨被仰出ニ付丈々使僧讚劬一發向ト申
ス事也此等ノ事件及ヒ春來御一新ノ御時節方端御談合
旁分洩已來二百余年ノ今日東西真正寺共和親相成御門

主モ互ニ御往來御誓約相成候由

○北越一揆ノ者多人數官軍ニ相抗シ候事全ク朝廷ノ
御趣意ヲ謬傳イタシ候事ヨリ起候北越ハ元來真宗本願
寺門侶多ク質朴鈍實ニテ兼テ佛法信仰ノ外御一新之御
趣意ハ畢竟廢佛可被遊ト心得透候事ニテ朝廷ニモ深
ク御配心被為在以勅命東西門主始真正寺佛光寺ニ至
ル迄被召呼早速下向教諭鎮靜可致被仰付候内畢竟廢
佛ハ兩部ノ分ノ被為廢候事分然ニ相成動亂鎮靜ステ
ニ仁和寺ノ宮様大施ヲ向ケサセラレタリ
○七月朔越後初久保村杉津村兩所ニテ戰爭有之

官軍大垣人數左之通

種村文之進組

討死

田中千藏

深手

加藤格之助

同

山田祐造

薄手

田辺三津次

分家淡路守家来

即死

淺羽守雄

右之外委細報知ヲ得ハ早々別記ニ出スヘシ

六月廿一日羽劔庄内ヨリ當地商家へ差越候書狀取

意ノ寫

○當四月中旬ヨリ大混雜ニテ同十九日最上表大戦有之
 其後小戦ハ外々ニ有之閏四月中旬庄内勢最上へ出張諸
 方ニオイテ戦争其後秋田勢五千人余當國境へ押来り候
 ニ付庄内ニモ手當有之人數操出シ官軍死傷多ク秋田勢
 引候間遂ニ秋田へ押寄互ニ勝敗有之稍ク此頃ニ至リ庄
 内引取當分ハ先平安ニテ人氣モ宜敷角力芝居等追々真
 行モ出来候様相成候テ大ニ繁昌ニ候ヘ_ヤ長々通船往来
 無之旅人モ出入_ア差留ラレ候故諸呂拂底諸相庭共飛騰_ト
 漸ク四五日前往来モ出来候様相成候間呂書差上候御地

モ定テ御用金被^レ仰出可有之ト察上候當國ニハ御聞及
之本間氏莫大之金子一手ニテ急速ニ調達致シ候ニ付外
々へハ不被^レ申付大ニ喜ヒ居候古金棒金砂金等モ有之候
由越後路へモ官軍御押寄ニ相成候間會津米沢越後小大
名衆名最上等庄内ヨリモ出勢イタシ日々大争戦之由勝
敗ハ中々急ニ附不^レ申トノ事△當年ノ儀植附後雨天續ニ
テ土用中モ雨天勝ニテ大ニ案居候処當六月中旬ヨリ晴
天打續キ大ニ宜敷相成申候秋成ハ不^レ惡ト存候
評者曰右書狀ハ庄内人ヨリ差越候事故自然自國ノ強
勢ヲ賞スルヤ必然スヘカラス

○先般朝鮮佛國ト争戦之節近海ニ米國商船碇泊致居候
処右争戦不時ニ差起リ候ニ付碇切捨退船致シ對刃侯へ
右注進ニ及ヒ碇借用致歸帆ニ及ヒ今般右借用ノ碇ヲ對
洲ノ添翰持參ニテ大坂ノ藏屋敷ニ返濟ニ來シトウ

横濱ノ新聞

○此頃蝦夷地へ鄂羅斯軍艦渡來多人数上陸ス是イカナ
ル事件ニヤ分リ不^レ申候ニ付佛英ノ軍艦ヲヤリテ來故ヲ
問シム由事分明ヲ得ハ次篇ニ出スヘシ
○奥州ノ商人無印鑑ニテ蠶卵紙生絲等諸品賣買ニ來ル
者アリ横濱ノ吏探索又四十人ヲ追捕ス東軍ノ細作ナラ

八月六日浪華橋へ張紙有之候写

濱ニテ切付置候

津ノ國屋伊右衛門

一此者義數年来萬民之苦ヲモ考ヘズ米穀ヲ買シメ候此罪ニヨリテ如是天誅ヲ加ルモノ也

此外ノ者共數々カクノ如キ聞及ヒ改心不致候時ハ同罪ニ可致者也外ニ名前此以後タシカニ記ス出ス者也

○八月八日早天久我殿天保山ヨリ蒸氣船御發行ノ事

○八月四日大坂府兵隊號向後浪花隊ト可稱御申渡有之

○同 五日加州ヨリ歸リシ人持歸候戦死ノ人ノ詩

作者姓名未詳

恰遇男見得意秋肥驄嘶握劍鳴鞞微臣有死君恩報恢復誰

為舊 帝州

哀鴻朝度雪峰驛寒馬夜嘶千曲濱縱有微軀期馬革忠魂不死護 楓宸

右後作ニテ見レハ長岡戦争ノ時討亡ノ詩乎

内外新聞第十

○當春正月德川氏浪花開城後軍艦ニテ江府ニ退走ノ事
件日本在苗ノ外國人ハ大概此ヲ知トイヘ其節ハ外國
ハ巨細ニイマタ通セサリシ故カ子テ德川氏ヨリ米國
ヘ訛ヘオキシ軍艦全成功ニ付其節横濱ニ渡シ来ルル
處横濱警衛ノ肥前ノ兵隊ヨリ此ヲ分捕セントス其故ハ
今般渡来ノ軍艦ニ米自國ノ船印ヲ不用德川氏依用ノ
ノ船印ヲ相用ヒ来ル故也右段々應接ニ及シカ共米人
引不致何方此方ニテ德川氏ヨリ訛ヘニテ渡来セシ故當
德川氏ノ船印ヲ用シ也トイロク相拒ミ議論紛々タリ

レ此頃ニ稍ク 朝廷ニ屬セシト

○先ニ第四編ニ布告シタル當生玉社附真言宗ノ寺十坊
共仔細アリテ早々立退可申被 仰付即日佛具等引拂立
退キ其後追々歎願シタテマツリシ由聞シカ近日安堵如
元被 仰付シトソ

但シ是迄ハ社領ハ生玉ヨリ支配セシカ今般改テ司農
局ノ御支配トナリシト也

○八月上旬久我殿御發行後エ中御門殿御着同十一日貨
幣局御巡檢有之御用モ有之ヤ委細聞知セハ後編ニ出ス
但シ貨幣局ハ近來當浪華鱸谷一丁目へ御關ニ相成去

ル七月朔日ヨリ御吹立ニ相成候

已下ノ事件ハ前來已ニ聞知アラニカナレト其誤謬漏
失モ又多シ今般確實ノ明抄ヲ得候ヲ以テ是ヲ記載ス
讀者陳腐ヲ咎ルナカレ

雪峠芋坂戦争記

○後四月廿六日夕ノ尅官軍越後國魚沼郡千手馱ヲ發シ
同郡小千谷馱エ進軍セントス前日我牒者報ノ去ク小千
谷ヨリ二里前一當リテ雪峠芋坂ト去所アリ頗ル險難ノ
由賊兵此巖邑ニヨリテ假ニ砲臺ヲ設ケ防戦ノ備ヲナス
由ナリ此故ニ前夕具ニ進撃ノ分配ヲナス先陣高田二陣

尾州三陣松本四陣松代後陣監軍附飯田松代ノ兵トス又
十日町ニ在ル上田須坂六川ノ三藩ノ兵ヲ以テ別ニ信濃
川ノ東芋坂ノ傍ヲ岩沢ノ渡口ニ進軍セシム賊兵モアラ
カジメ此ヲ知り通船渡船ヲ破リ通路ヲ断アル由コノ故
尾州藩ヨリ千手辺ノ諸船ヲ引テ本道ノ軍ト共三里下真
人村渡口へ下シム是芋坂戰酣之時岩沢ニ會シ川東ノ官
軍ヲ渡シ賊ノ後ヲ撃シメン策ナリ當日雨天ニテ道路泥
濘守時真人村へ着陣雨暗ル先陣高田ノ兵石名坂ト去ル
ニ在左傍山上賊兵ノ在リ報ス乃高田尾州分隊ノ山ニ
ホル前路ステニ砲声ヲリ斥候報シニ去ク三十丁先ニ賊

兵屯ス砲聲ハ松代斥候士ヨリ發砲ノ聲也ト即尅進軍松
本ノ兵ノ之遲緩不進賊軍カ子テ設置死ノ假砲臺ニヨリ
大小砲ヲ以テ狙撃ス官軍大ニ苦戦ス或云賊川ヲ渡シ東
岸ヨリ發砲スト衆心競々タリ仍テ先ニ真人渡口へ下セ
シ舟ニ松代一小隊ヲ分テ松本兵ヲ假シ川東ニ渡ラシメ
衆心ヲ安ンス且又高田ノ兵本道ノ右川畔ヲ進ミ賊ノ側
面ヲ撃シメ松代勢ハ左ノ山上ニ回り賊ノ後ニ出シム監
軍附飯田松代ノ兵モ山谷ノ間ヲ進行賊軍雪峠ノ半腹ニ
テ大小砲ヲ發下ス彈丸裂逆勢ニ猛然ナリ官軍不屈側面
ノ山ニノボリ砲撃ス四面齊ク攻ム時巳ニ申ノ半尅ナリ

賊兵俄然ト潰散ス是松代勢力賊ノ右側ヲ砲撃スル故也
仍テ本道ノ兵モ一時大鼓シテ進ム賊兵狼狽敗走ス追撃
シテ雪峠麓芋坂茶店ノ前ニ至ル遂ニ雪峠ヲ奪ヒ池ノ原
村ニ至ル時已ニ昏黒追撃不便兵士モ亦勞ス仍テ今夜ハ
此処ニ宿陣ス諸隊追々着ス各分配シテ警備ノ居上田須
坂六川ノ兵モ朔ニ後レテ着ス今夜宿陣ノ池ノ原村ハ小
千谷ヲ距ル事一里半賊ノ根拠也仍テ糧食等多分取今日
賊勢二百五十人余大砲二挺アリ翌廿七日小千谷へ進軍
前夕賊兵陣營ヲ棄テ川ヲ渡リ長岡妙見村へ逃走ナス由
今曉昨日川東へ回りシ松代ノ兵松代ノ兵ヲ從テ先ノ賊

ノ空營ニ入り惣軍ノ至ルヲ待今日曉天ヨリ小出島合戦
拍寄ハ官軍大勝利ノ趣追々報知ヲ得タリ

片貝村戦争ノ記事

○五月二日夜賊兵股ノ町ヨリ関原路ヲ經テ片貝小千谷ヨリ
ニ里斗リ
ニ来ルト報知ス仍テ官軍ニモ畧分配先陣高田惣勢二陣
尾効正氣隊後陣松代戦士一隊小銃一小隊并ニ大砲二門
序次ヲ以テ發ス高田尾州期ニオクレテ松代ノ兵ノ進
テ幸田村小千谷ヨリ
半道斗リヲ經テ下山屋村堤上ニ陣ス小千谷ヨリ
一里同
三日早曉惣軍ヲ片貝ニ進メ斥候ヲ以テ賊情ヲ探ル途中
賊ノ斥候ニ逢フ互ニ砲發ノ軍ヲ下山屋村ノ左ニ進ム賊

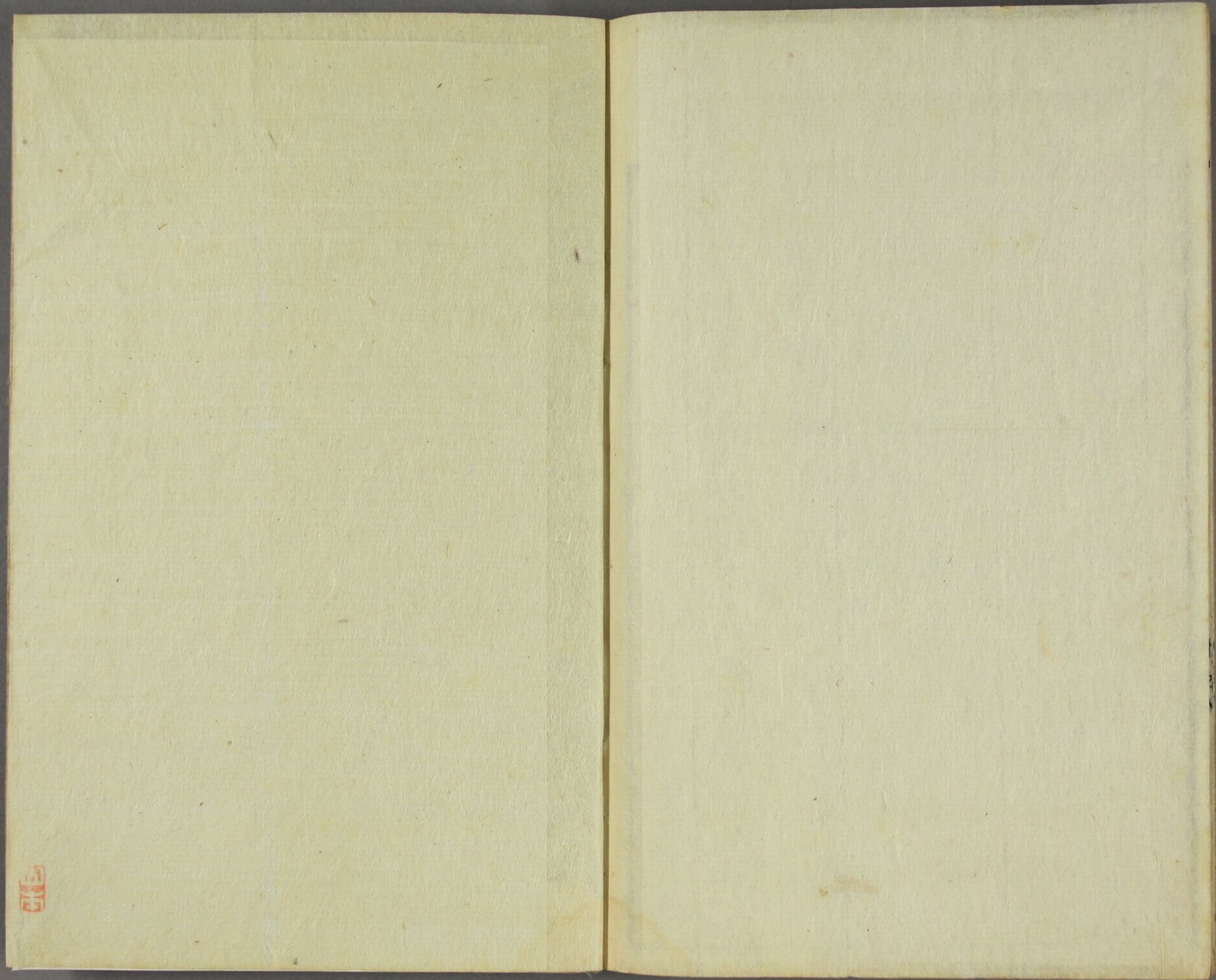
二〇
營片貝村ニ在忽我軍へ大砲ヲ發ス我軍モ亦大砲ヲ以テ
相應ス乃チ兵ヲ二道ニ分ツ高田分隊ニ松代ノ兵ヲ加ヘ
正隊トシ本道ヨリ進メ又高田ノ分隊ニ尾州正氣隊ヲ加
エ奇隊トシ片貝ノ左鴻巣ヨリ進時ニ巳ノ尅ナリ此辺ス
ヘテ平原ナレバ林木翳蔽彼我ノ進退ヲ不弁本道ノ兵下
山屋村ニ砲撃ス賊モ又本營ヲ離レテ小溝ノ内ニ潜伏シ
吾ヲ拒ク我奇隊同時ニ鴻巣ニ至ル賊ノ伏兵ニ會ス互ニ
砲戦アリ遂ニ賊ヲヤフリ鴻巣ニ入烽火ヲ以テ兵勢ヲ張
ル當村ノ左ニ丁斗リ隔テ聯連タル小山アリ山腹ニ小千
谷ヨリ片貝へ渉ル間道アリ此処ニ人ノ屯スルケハイア

一
リ始出勢前我應援ノ兵此道ヨリ進ムヲ告ク故山中ノ響
彼我不明ニヨリテ高田ノ兵ヲ分テ是ニイヨク進テ本
營ニ迫リ攻ム時ニ山腹ヨリ秘烈トシ我ヲ横撃スヤムコ
不得退ク事ニ丁斗リ林叢ニヨリテ賊勢ヲ拒ク賊兵代リ
テ鴻巣ニ入烽火ヲ揚テ兵勢ヲ助ク鴻巣ヨリニ丁斗リ南
坪尾村アリ我兵ヲ此ニ分テ背腹敵陣ヲ突ントス先ニ山
腹ノ兵涉獵ノタメ出セシ高田勢モ退テコ、ニアリ我分
隊トアハセテ復鴻巣ニ迫ル賊腹背ノ襲撃ニ苦ミ片貝工
定ル我鴻巣ノ兵機ニ乘テ片貝ニ進ム後ニ賊アリ山腹ノ
賊兵ト我ヲ打事急也我軍鴻巣ヲ出テ旁ノ小堤ニヨリテ

能防戦ス賊兵復鴻臚ニ入り燧ヲ拳ク時ニ我本道ノ正兵
隊始砲戦數寇頗ル賊兵敗形ヲ見ル松代先陣ニアリ高田
勢如何シケン我備ル処ノ大銃隊ヲ誤リ賊兵我後ヲ斷ナ
リト見テ忽チ砲ヲ我大銃隊ヘ發ス我緇重是カタマニ恐
レテ逡巡ス是ニ至テ高田猶我兵ノ賊ヲ敗ルト疑ヒ自
潰テ本道ヲ退ク賊兵機ヲ得テ數道來リ追我ヲ包撃セン
トス不得已我惣軍退ク松代勢殿シテ下山屋ヲ去七八丁
叢莽ニ兵ヲ伏セ賊兵ヲ拒トス賊モ亦コレヲ慮リシヤ燧
ヲ拳テ不進實ニ一時ノ苦戦ナリ然ル処援兵トシテ松代
ノ別隊上田飯山ノ兵ヒニ至ルヨリ上田飯山ノ兩勢林叢

ニ入賊ヲ探索シ松代ノ兵進テ本道ヲ突加之薩長ノ應援
陸續トノ至ルニ會ス直ニ進テ山屋村ニ攻撃松代是ニ次
テ砲戦敵復敗レテ片貝ニ走ル茲ニ尾羽ノ兵應援ノタメ
先ニ敵勢屯集ノ鴻臚左山腹ノ道ニ出横ニ片貝ヲ撃同一
時本道薩長松代ノ兵烈戦大ニ賊軍ヲ敗リ片貝ヲ取賊軍
遠走ル先ニ退シ高田尾州ノ兵モ來會セリ諸隊分取不可
枚拳當日戦争巳ノ刻ニ始リ申ノ寇ニ終ル會藩八九四百
人余ナリ下

同日藥師峠戦聞十一篇ニ出ス
上刃辺エ被 仰出候



111

